

オンライン上で発生する隠された性暴力がもたらす 新たなトラウマ被害：支援法確立を目指した実態理解

(研究助成金 60万円)

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 准教授 伊藤 大輔

[2006年 徳島大学総合科学部人間社会学科卒
2011年 早稲田大学大学院人間科学研究科修了]

共同研究者 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 松岡 優菜
兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 岡部 友峻

〔研究応募書〕

研究目的

COVID-19の流行によって対面交流が制限されたことに伴い、オンライン上でのコミュニケーションが急速に発展した。実際に、メタバースに代表されるオンライン上の仮想空間市場は爆発的に拡大し、eスポーツやデジタルアート、仮想不動産などの新たな価値が生み出されている。一方で、メタバース内でのわいせつ行為やセクハラといったオンライン性暴力に対して社会的関心が高まっている。特に、メタバースのキャラクターを用いたアバター性暴力は、加害行為を防ぐための仕組みが十分に整備されていない仮想空間で蔓延しており、被害者は現実世界における性暴力と同様のPTSD症状を生じさせることもあり、深刻な精神的苦痛を呈することが指摘されている (Danaher, 2018)。

また、Twitterに代表されるオンライン世界の一種であるSNSにおいても、オンライン性暴力は蔓延している。例えば、匿名アカウントであることを利用して、別のユーザーに対して、卑猥な言葉を投げかけたり、卑猥な画像を送り付けたりなどの被害が後を立たない。特に、匿名であるがゆえに、このような性暴力の被害者は、問題の解決を見込めないと考え、相談しない実態がある。そのため、被害体験に関する苦痛を自ら抱え続けることとなり、PTSD症状などの深刻な精神問題につながっている。

このような状況や問題が生じているにも関わらず、アバター性暴力の現状やSNS上の性暴力被害者の精神的苦痛の実態は、国内外問わず実証的に示されていない。そのため、仮想空間やSNS世界を安全に過ごすための仕組み整備に向けて、アバター性暴力の問題性やSNS上の性暴力を科学的に解明することは急務である。また、アバター性暴力やSNS上の性暴力だけでなく、Zoomなどでわいせつな画像を送受信するセクスティングやリ

ベンジボルノなどのオンライン性暴力 (TFSV: Technology Facilitated Sexual Violence) も急増しており、その対策は喫緊の課題である (Henry & Powe, 2019)。

そこで、本研究では、SNSやメタバースユーザーの成人を対象に、Web式質問紙調査を実施し、アバター性暴力やセクスティングなどの性暴力 (TFSV) の種類や発生率、被害者が受ける精神的苦痛やPTSD症状の実態、それらの問題に対する心理社会的保護要因を明らかにすることを目的とする。そして、現在、本研究の前段階に位置づけられる研究として「被害体験が引き起こす問題の日韓調査」を2022年11～12月に実施する。

研究実施計画の概要

■オンライン性暴力 (TFSV) の実態解明および被害が精神健康に及ぼす影響の解明

アバター性暴力および、SNSやオンラインビデオアプリなどのその他のオンライン性暴力 (TFSV) の被害経験について、19歳以上の成人600名程度を対象にしてWeb式質問紙調査を実施する。特に、性別、年齢、地域を人口動態分布に即してサンプリングすることで、日本の実態に即したデータを明らかにする。SOGIや年齢、利用するアプリ特性などの人口統計学的要因による差異および、オンライン性暴力の実態や支援ニーズの高い集団を特定する。アバター性暴力やTFSVが被害者に与える影響 (PTSD症状、自傷リスク、抑うつ不安など) を明らかにする。被害者のSOGIによって、オンライン性暴力がもたらす影響性が異なるというPowell & Henry (2019) の仮説を検証し、性暴力被害に対する心理社会的保護要因 (セルフ・コンパッションなど; Raudales et al., 2022) とリスク因子 (小児期の虐待) の役割についても探索的に明らかにする。

■倫理面の配慮

本研究は「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に準拠して計画立案した。また、申請者が所属する機関の倫理委員会の承認を得た後に実施する。特に、本研究で行うWeb型質問紙調査では身体的な侵襲を伴うことはないと考えられるが、研究説明を十分に行い、インフォームド・コンセントを電磁的手法にて得たうえで実施する。具体的には、1) 研究目的と意義、具体的な手法、成果の公表方法、結果の開示、2) 研究への参加が任意であること、3) 一度同意しても、研究のいかなる時点においても参加同意を撤回することが可能であること、4) 研究協力の拒否や撤回により不利益は生じない旨を伝える。その上で同意が得られた者に対しては同意撤回書も配布し、研究を実施する。また、研究データの扱いは、ヘルシンキ宣言および個人情報保護法を遵守の上で処理する。

I 緒言

近年の感染症の流行をきっかけに、オンライン上のコミュニケーションツールは急速に拡大した。そして、仕事や教育、産業領域など、様々な人間生活の領域において多くの恩恵をもたらした。一方で、オンライン上での迷惑行為や性的ないやがらせ、ハラスメント行為が発生していることが報告されている (e.g., Powel & & Henry, 2019)。つまり、活発化するオンライン上のコミュニケーションを安全に

行うためには、オンライン上で発生する性的な嫌がらせや、ハラスメント (TFSV: Technology Facilitated Sexual Violence) の実態を定量的に明らかにしたうえで、その被害に関する対策および支援方法を検討する必要がある。特に近年は、VR ゴーグルといった仮想空間市場も急速に発達しており、ソーシャルVR上のアバターを用いた性的暴力や性的な嫌がらせが報告されている (e.g., Blackwell et al., 2019)。これらのことから、SNSやオンラインビデオ通話などの既存のデジタルテクノロジー上で発生する性暴力だけでなく、ソーシャルVR上で発生する性暴力の実態についても明らかにする必要がある。

そこで、本研究ではオンライン上で発生する性暴力被害の実態を明らかにすることを目的とした。また、本邦で近年行われたインターネット調査の報告を踏まえ (男女共同参画局, 2023)、オンラインではない対面で発生する性暴力の実態についても検討した。なお、本研究は日本と韓国の研究者らと行う共同研究の一貫でもあり、韓国で行われた事前調査および文献レビューから、オンラインユーザーは若年者に多いことや若年者女性が性暴力被害に遭遇しやすい母集団であることを考慮し、19歳~49歳を対象に調査を行うこととした。

II 研究方法

1. 調査対象者

インターネット調査会社 (マイボイスコム) の保有するモニターを対象に Web 調査を実施した。日本人438名から回答を得て、調査回答を最小限の努力で回答しようとする者を特定するために、Maniaci & Rogge (2014) を参考にトラップ設問に該当しなかった408名 (出生時女性207名, 男性201名, *Mean age* = 36.17, *SD* = 8.61) を分析対象とした。

具体的には、まず、調査対象者は調査会社からアンケート回答者募集に関する案内を受け取った。そして、回答者募集に記載のリンクへアクセスすることによって、インフォームド・コンセントや研究概要などに関する説明文が記載された画面が提示された。そして、研究目的と意義、具体的な手法、成果の公表方法、結果の開示、研究への参加が任意であること、一度同意しても、研究のいかなる時点においても参加同意を撤回することが可能であること、研究協力の拒否や撤回によって不利益は生じないこと等が記載された説明文を読み、同意した者が調査票への回答を開始した。

2. 調査材料

1) デモグラフィック項目

年齢、セクシュアリティ、最終学歴、雇用形態、交際状況、居住都道府県、収入、インターネット利用時間について回答を求めた。

2) Sexual Experiences Survey-Short Forms Victimization (SES-SFV) (Koss et al., 2007)

7つの状況リストそれぞれに対して、望まない性的行為がどのように行われたかを示した5つ選択

肢で回答するリストである。過去12ヶ月間、14歳以降から1年前、14歳以前の3区分に分けた上で、これまでの性暴力被害体験への回答を求めた。

3) Technology Facilitated Sexual Violence Items (TFSV) (Powell & Henry, 2019)

21項目で構成され、オンラインやデジタルデバイス上で発生する性暴力経験について尋ねる尺度である。これまでの人生における各項目の経験の頻度についてそれぞれ回答を求めた。さらに、本研究では、近年のディープフェイク画像生成アプリおよび仮想空間世界であるヴァーチャルリアリティの拡大やデートングアプリを用いた性暴力被害、グルーミングを踏まえて、新たに11項目を追加および修正して用いた。なお、新たに追加および修正した項目は、原著者らと協議のうえで決定した。

4) ライフイベントチェックリスト (LEC-5) (Weathers et al., 2013; 飛鳥井・筒井)

対象者がこれまで体験した不快な性的体験、または、自然災害、火事、交通事故、性的暴行などの出来事のうち、今も思い出すと最も苦痛な出来事が、PTSDの診断基準Aに該当する体験であるかどうかを特定するため、回答者が体験した出来事や経過時間などについての質問への回答を求めた。

5) ストレスフルな出来事の最中に感じた非人間化 (Moor et al., 2013)

5項目4件法で構成され、トラウマ出来事の中に感じた屈辱感や尊厳の傷つきの感覚への回答を求めた。

6) PTSD Checklist for DSM-5 (PCL-5) (Ito et al., 2019)

20項目5件法で構成され、PTSDの症状の有無やその程度について回答を求めた。

7) Trauma-Related Guilt Inventory (TRGI) (Chou et al, 2023)

32項目5件法で構成されるが、本研究ではトラウマ体験に関連した罪悪感を測定するために、そのうちの11項目への回答を求めた。

8) Self-objectification Scale (SOS) (Talmon & Ginzburg, 2016)

17項目5件法で構成され、自身を対象として扱ってしまう感覚の自己客体化の程度への回答を求めた。

9) Self-dehumanization Scale (SDS) (Bastian et al., 2010)

8項目7件法で構成され、現在、自分自身が人間らしさから離れている自己非人間化を感じている程度について回答を求めた。

10) Compulsive Sexual Behavior Disorder Scale-7 (CSBD-7) (Bóthe et al., 2023)

7項目4件法で構成され、やめたくてもやめることのできない性的行動である制御できない性的行動の程度について回答を求めた。

11) Social Phobia Scale (SPS) / Social Interaction Anxiety Scale (SIAS) (金井ら, 2004)

40項目5件法で構成され、他者からみられることに対する不安および対人交流に関する不安について回答を求めた。

12) Patient Health Questionnaire (PHQ-9) (Muramatsu et al., 2018)

9項目4件法で構成され、過去2週間の抑うつ症状に関する程度について回答を求めた。

13) Difficulties in Emotion Regulation Scale (DERS) (Gratz & Roemer, 2004)

36項目5件法で構成され、自らの感情を上手にコントロールする程度である感情制御について回答を求めた。

14) Suicidal Behaviors Questionnaire-Revised (SBQ-R) (Araki et al., 2021)

4つの質問で構成されており、自殺念慮に関する考えや経験への回答を求めた。

Ⅲ 研究結果

1. 各変数の記述統計量

はじめに、本研究の分析対象者となった408名の年齢とインターネット利用の平均値と標準偏差を表1に示す。対象者は、私的にインターネットを利用する1日あたりの平均時間は3時間超であり、私用以外の仕事や教育などの目的でインターネットを利用する公的な利用の場合は2時間弱であった。また、インターネットを利用する時間のうち、平均して65.98%の時間はスマートフォンを用いてアクセスしていた。

表1 デモグラフィック項目の記述統計 (N=408)

	Mean	SD
年齢	36.17	8.61
私的インターネット利用時間 (hour)	3.93	3.21
公的インターネット利用時間 (hour)	2.13	2.96
スマートフォン利用割合 (%)	65.98	

Note. ネット利用時間の分単位は10進法換算して時間 (hour) に加算

次に、デモグラフィック項目について表2および表3に示す。対象者の出生時性別は男性が201名であり、女性は207名であった。また、性指向は対象者の9割が異性愛であった(91%)。最終卒業学校については、6割以上の者が教育歴年数13年以上であった。職業状況では、4割以上の者が正社員などに属しており、28%の者が職に属していない状況であった。交際状況は、41%の者は現在誰とも交際関係にараず、45%の者が婚姻中または内縁のパートナーがいる状態であった。収入については、4割の者が200万未満であった。居住地は、関東圏内に暮らす者が最も多かった。

表2 デモグラフィック項目の度数 (N=408)

	n	%
出生時性別		
男	201	49.3
女	207	50.7
ジェンダー		
男	200	49.0
女	203	49.8
ノンバイナリー、ジェンダーフルイド、もしくは、ジェンダークィア	3	0.7
その他	2	0.5
性指向		
異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない。(異性にのみ性愛感情を抱く人)	374	91.7
ゲイ・レズビアン、同性愛者(同性のみに性愛感情を抱く人)	1	0.2
主に異性に性愛感情を抱くが、時々、同性に性愛感情を抱くことがある	6	1.5
主に同性に性愛感情を抱くが、時々、異性に性愛感情を抱くことがある	1	0.2
バイセクシャル・両性愛者(男女どちらにも性愛感情を抱く人)	3	0.7
パンセクシャル・全性愛者(性別に関係なく性愛感情を抱く人)	3	0.7
アセクシャル・無性愛者(誰に対しても性愛感情を抱かない人)	4	1.0
自分の性的指向(性愛感情を抱く対象)はまだ分からない/現在は、自分の性的指向に疑問を持っている	10	2.5
その他	2	0.5
答えたくない	4	1.0
最終卒業学校		
小学校	0	0.0
中学校	23	5.6
高等学校	118	28.9
専門学校・高専(高等専門学校)・大学学部・大学院以上	267	65.4

表3 デモグラフィック項目の度数 (N=408)

	n	%
職業状況		
正社員、常勤職、フルタイム	191	46.8
パートタイム	72	17.6
有期契約労働者、臨時従業員（主に、一定の期限付きで携わる仕事を指します。例えば、臨時職員、臨時工、派遣社員、フリーランス、任期付き職員、日雇いなど）	28	6.9
無職	117	28.7
交際状況		
誰とも交際関係や婚姻関係にない	170	41.7
交際中	47	11.5
婚姻中・内縁のパートナーがいる	183	44.9
死別を経験しており、現在は誰とも交際、婚姻、内縁関係にない	0	0.0
離婚を経験しており、現在は誰とも交際、婚姻、内縁関係にない	8	2.0
収入		
200万円未満	162	39.7
200～400万円未満	91	22.3
400～600万円未満	60	14.7
600～800万円未満	25	6.1
800～1000万円未満	13	3.2
1000～1200万円未満	6	1.5
1200～1500万円未満	1	0.2
1500～2000万円未満	0	0.0
2000万円以上	2	0.5
わからない	13	3.2
答えない	35	8.6
居住地域		
北海道	11	2.7
東北	18	4.4
関東	159	39.0
北陸	18	4.4
中部	51	12.5
近畿	78	19.1
中国	24	5.9
四国	10	2.5
九州	39	9.6

2. 性暴力被害者の特徴

まず、本研究で使用したオフラインでの性暴力被害体験を測定するSESと、オンラインやテクノロジーによって促進された性暴力を測定するTFSV-Vを用いて、調査対象者の性暴力被害体験の実態について確認した(表4)。その結果、本研究の対象者408名のうち、オフライン型の性暴力被害とオンライン型の性暴力被害のどちらか一方でも経験したことがあると回答した者は23% ($n = 94$ 名; 女性75名: 平均年齢35.8, $SD = 8.2$; 男性19名: 平均年齢33.9, $SD = 8.0$)であった。また、オンライン型のみを経験した者は、12.5% ($n = 51$ 名; 女性37名: 平均年齢36.6, $SD = 8.1$; 男性14名: 平均年齢35.6, $SD = 8.6$)であった。さらに、オフライン型の性暴力被害のみを経験した者は、3.7% ($n = 15$ 名; 女性13名: 平均年齢36.2, $SD = 9.6$; 男性2名: 平均年齢28, $SD = 4.2$)であった。どちらも経験したことがあると回答した者は、6.9% ($n = 28$ 名, 女性25名: 平均年齢34.3, $SD = 7.5$; 男性3名: 平均年齢30.0, $SD = 3.46$)であった。

表4 性暴力被害経験者の実態

	オンラインと対面 どちらか		オンラインのみ		対面のみ		オンラインと対面 両方	
	$n = 94$		$n = 51$		$n = 15$		$n = 28$	
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)
全体年齢	36.39	(8.74)	36.35	(8.18)	35.13	(9.45)	33.85	(7.29)
性別 (人)								
女	75		37		15		28	
男	19		14		2		3	
女年齢	35.8	8.2	36.6	8.1	36.2	9.6	34.3	7.5
男年齢	33.9	8	35.6	8.6	28	4.2	30	3.46

3. 性暴力被害者における各要因との比較

次に、オフラインでの性暴力被害体験を測定するSESと、オンラインやテクノロジーによって促進された性暴力を測定するTFSV-Vを用いて、対象者を4つのグループに分類した(オンラインのみ性暴力被害経験がある群、オフラインとして対面での性暴力の被害体験がある群、オンラインと対面での性暴力被害体験がある群、オンライン及び対面での性暴力の被害経験が無い群)。そして、各群の特徴を明らかにするために、各測定尺度を従属変数とする一要因分散分析を実施した(表5)。

具体的には、まず、最も苦痛に感じる性的な体験に関するPTSD症状を測定するためのPCL-5 (worst sexual trauma)、ストレスフルな出来事の最中に感じた非人間化を測定するためのat event、トラウ

マ体験に関連した罪悪感を測定するためのTRGI, ストレスフルに感じられた性的な体験に関するPTSD症状を測定するためのPCL-5 (any sexual experience) を用いて, オンラインのみの性的被害体験経験者と対面のみの性的被害体験者と, オンラインと対面の両方の性的被害経験者の3群の平均値の差を検討した。その結果, PCL-5 (worst sexual trauma), TRGI, PCL-5 (any sexual experience) においては統計的な有意差は確認されず, at eventのみに統計的な有意差が示された。多重比較の結果, オンラインのみの性暴力被害経験者よりも, 対面のみの性暴力被害経験者や対面とオンラインの両方の性暴力被害経験者の方が, at eventにおいて高い値を示した。

次に, 自分自身を何らかの対象として扱ってしまう感覚である自己客体化の程度を測定するためのSOS, 自分自身が人間らしさから離れている自己非人間化を感じている程度を測定するためのSDS, 自分自身の性的行動をやめたくてもやめることができない程度を測定するためのCSBD-7, 他者から見られることに対する不安の程度を測定するためのSPS, 対人交流に関する不安の程度を測定するためのSIAS, 過去2週間における抑うつ症状の程度を測定するためのPHQ-9, 自らの感情を上手にコントロールする程度を測定するためのDERS, 自殺念慮に関する考えや経験の程度を測定するためのSBQ-Rを用いて, 性暴力被害経験のない者, オンラインのみの性的被害体験経験者と対面のみの性的被害体験者と, オンラインと対面の両方の性的被害経験者の4群の平均値の差を検討した。その結果, SDSにおいては統計的な有意差は確認されなかったものの, SOS, CSBD-7, SPI, SIAS, PHQ-9, DERS, SBQRにおいて, 統計的な有意差が確認された。多重比較の結果, SOSに関しては, 非経験者よりも対面のみでの経験者および対面とオンラインの両方の経験者の方が高く, オンラインのみでの経験者よりも対面とオンラインの両方の経験者の方が高いことが示された。また, CSBD-7に関しては, 性暴力非経験者よりもオンラインおよび対面の両方とも経験している者の方が有意に高いことが確認された。同様に, SPIについては, 性暴力非経験者よりもオンラインおよび対面の両方とも経験している者の方が有意に高く, また, オンラインのみの性暴力被害経験者よりもオンラインおよび対面の両方とも経験している者の方が有意に高いことが示された。SIASに関しては, 性暴力非経験者よりもオンラインおよび対面の両方とも経験している者の方が有意に高いことが確認された。さらに, PHQ-9に関しては, 性暴力の非経験者よりも, オンラインおよび対面の両方とも経験している者の方が有意に高く, オンラインのみの性暴力被害経験者よりもオンラインおよび対面の両方とも経験している者の方が有意に高いことが確認された。そして, DERSに関しては, 性暴力被害経験者と比較して, オンラインおよび対面の両方とも経験している者の方が有意に高いことが確認された。最後に, SBQ-Rに関しては, 性暴力の被害を受けていない者と比較して, オンラインや対面問わず何らかの性暴力被害経験がある者の方が有意に高く, その中でも, オンラインのみの性暴力被害経験者よりもオンラインと対面の両方の性暴力被害経験者の方が有意に高いことが確認された。

表 5 各変数を従属変数とした一要因分散分析

	体験無し (no) <i>n</i> = 314		オンラインのみ (TFSV) <i>n</i> = 51		対面のみ (SES) <i>n</i> = 15		オンラインと対面 両方 (SESTFSV) <i>n</i> = 28		<i>p</i>
	<i>Mean</i>	<i>(SD)</i>	<i>Mean</i>	<i>(SD)</i>	<i>Mean</i>	<i>(SD)</i>	<i>Mean</i>	<i>(SD)</i>	
PCL-5 (worst sexual traum)			11.2	(18.1)	16.7	(21.1)	18.5	(15.2)	.171
at event			12.3	(4.8)	15.4	(3.7)	15.2	(4.3)	.010
TRGI			6.6	(9.9)	10.2	(13.0)	11.8	(10.4)	.104
PCL-5 (any sexual experience)			7.5	(14.4)	12.9	(20.9)	14.2	(16.9)	.196
SOS	34.0	(11.9)	35.6	(12.4)	44.2	(13.2)	43.2	(15.9)	.003
SDS	30.4	(6.3)	30.8	(8.1)	31.3	(7.9)	31.9	(7.2)	.720
CSBD	9.1	(3.2)	9.6	(3.6)	8.7	(2.1)	11.1	(3.5)	.028
SPI	10.9	(13.1)	13.3	(15.4)	19.3	(12.9)	25.5	(22.3)	.002
SIAS	29.0	(16.4)	33.0	(18.8)	39.5	(15.0)	41.5	(22.0)	.004
PHQ-9	12.8	(4.8)	13.9	(5.2)	15.6	(7.1)	18.9	(7.8)	.001
DERS	89.2	(21.1)	96.6	(26.5)	96.9	(26.6)	108.8	(34.6)	.012
SBQR	5.0	(2.9)	6.6	(3.8)	8.4	(5.0)	9.7	(4.2)	< .001
Post hoc									
PCL-5 (worst sexual traum)									
at event	TFSV < SES, TFSV < SESTFSV								
TRGI									
PCL-5 (any sexual experience)									
SOS	no < SES, no < SESTFSV, TFSV < SESTFSV								
SDS									
CSBD	no < SESTFSV								
SPI	no < SESTFSV, TFSV < SESTFSV								
SIAS	no < SESTFSV								
PHQ-9	no < SESTFSV, TFSV < SESTFSV								
DERS	no < SESTFSV								
SBQR	no < SESTFSV, no < TFSV, no < SES, TFSV < SESTFSV								

4. 性的被害体験のPTSD症状と関連する要因

オンラインまたは対面、その両方における何らかの性暴力被害体験を経験した者94名を対象に、性的被害体験におけるPTSD症状に関連する要因を明らかにするために、相関分析を実施した(表6)。その結果、PTSD症状は、トラウマ体験時の罪悪感と強い正の相関があることが示された($r = .69$)。また、PTSD症状は、やめたくてもやめることのできない性的行動($r = .31$)や出来事当時の非人間化の感覚($r = .31$)、自殺念慮($r = .30$)とも関連することが示された。また、感情を上手くコントロールできないDERSや抑うつ症状のPHQ-9、他者から見られることに対する不安が有意な正の相関が示された。ただし、対人交流に関する不安とは関連していないことが確認された。

表6 PTSD症状と各変数の相関関係 ($n = 94$)

	PCL-5	
	Pearson's r	p
at event	.31 **	.00
TRGI	.69 ***	< .001
SOS	.24 *	.02
SDS	.22 *	.03
CSBD	.31 **	.00
SPI	.27 **	.01
SIAS	.14	.17
PHQ-9	.25 *	.01
DERS	.28 **	.01
SBQR	.30 **	.00

Note. * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

5. オンライン上で発生する性暴力被害体験の検討

オンライン上でどのような性暴力が発生するのかを探索的に明らかにするために、TFSVの各項目に関して、これまで体験した者と体験したことが無い者の度数を確認した(表7)。その結果、オンライン上でのセクシャルハラスメントは本研究の対象者の11%が経験しており、望んでいないにも関わらず性的に露骨な画像やコメント、メール、テキストメッセージが送られてくる体験は、本研究の対象者の10.3%が経験したことがあると確認された。一方で、アバターやVR世界といった仮想空間上での性暴力は確認されなかった。

表7 オンライン上で発生する性暴力の体験率

	体験あり		体験なし	
	n	%	n	%
1 【セクシャルハラスメントを受けた】	45	11.0	363	89.0
2 【望んでいないのに、性的に露骨な画像やコメント、メール、テキストメッセージが送られてきた】	42	10.3	366	89.7
3 【今の交際相手または元交際相手が、オンラインまたは携帯電話を使用して、私がどこにいるか、誰と一緒にいるか、または何をしているかを1日に何度もチェックしてきたことがある】	23	5.6	385	94.4
4 【メールまたはテキストメッセージを通じて、またはオンライン上で、繰り返し性的な要求をされたり、あるいは、望まない性的な要求をされた】	23	5.6	385	94.4
5 【今の交際相手または元交際相手が、私の許可なく私のメールや他のオンラインアカウントにアクセスした】	11	2.7	397	97.3
6 【オンライン上で、私に関する不快な性的コメントを多くの人の目に触れる形で投稿された】	0	0.0	408	100.0
7 【性的な対象や性的な嫌がらせの標的となるように、私の個人情報がオンライン上に流出されて、セックスの相手ができる書き込まれたりした】	3	0.7	405	99.3
8 【私の許可を得ることなく勝手に、私の裸またはセミヌード、他の性的な様子や物、または性的な意図が含まれた、写真やビデオを撮影されたことがある】	13	3.2	395	96.8
9 【私の許可を得ることなく勝手に、私の裸またはセミヌード、他の性的な様子や物、または性的な意図が含まれた、写真やビデオをオンライン上に投稿されたり、他の人に共有されたことがある】	0	0.0	408	100.0
10 【私の許可を得ることなく勝手に、私の日常的な写真やビデオを性的な表現とともにオンライン上に投稿されたり、他の人に共有されたことがある】	0	0.0	408	100.0
11 【私の許可を得ることなく勝手に、私の裸またはセミヌード、他の性的な様子や性に関連する物の写真やビデオをオンライン上に投稿したり、他の人に共有すると、おどされたことがある】	3	0.7	405	99.3
12 【私の許可を得ることなく勝手に、ディープフェイクなどの加工技術を用いて、ニセの私の性的な写真やビデオを作成されたことがある】	1	0.2	407	99.8
13 【私の許可を得ることなく勝手に、ディープフェイクなどの加工技術を用いて作成されたニセの私の性的な写真やビデオを、オンライン上に投稿されたり、他の人に共有されたことがある】	0	0.0	408	100.0
14 【私の許可を得ることなく勝手に、ディープフェイクなどの加工技術を用いて作成されたニセの私の性的な写真やビデオを、オンライン上に投稿したり、他の人に共有すると、おどされたことがある】	0	0.0	408	100.0
15 【望まない性的体験をしたとき、写真やビデオの撮影をされたことがある】	5	1.2	403	98.8
16 【望まない性的体験をしたときに撮られた写真やビデオを、オンライン上に投稿されたり、他の人に共有されたりしたことがある】	0	0.0	408	100.0

表 7 続き. オンライン上で発生する性暴力の体験率

	体験あり		体験なし	
	n	%	n	%
17 【望まない性的体験をしたときに、撮られた写真やビデオをオンライン上に投稿する、または他の人に共有すると、おどされたことがある】	0	0.0	408	100.0
18 【オンライン上で知り合った人との間で、オンライン上で望まない性的体験が起こった】	5	1.2	403	98.8
19 【オンライン上で知り合った人との間で、オフライン上で望まない性的体験が起こった】	5	1.2	403	98.8
20 【マッチングアプリや出会い系サイトで知り合った後、オンライン上でその人との間で望まない性的体験が起こった】	4	1.0	404	99.0
21 【マッチングアプリや出会い系サイトで知り合った後、オフライン上でその人との間で望まない性的体験が起こった】	11	2.7	397	97.3
22 【信頼できる関係性ができた後に、巧妙な手口で、性的に露骨なメッセージを送らされたり、送られてきたりしたことがある】	3	0.7	405	99.3
23 【信頼できる関係性ができた後に、巧妙な手口で、私の裸またはセミヌード、他の性的な様子や性に関連する写真やビデオを撮影されたことがある。】	3	0.7	405	99.3
24 【信頼できる関係性ができた後に、巧妙な手口で、私の裸またはセミヌード、他の性的な様子や性に関連する写真やビデオを、オンライン上に投稿したり、他の人に共有するように誘導されたことがある】	0	0.0	408	100.0
25 【オンラインを通して信頼できる関係性ができた後に、相手が巧妙な手口を用いたことで、オフライン上での性的体験が起こった】	3	0.7	405	99.3
26 【私の自認する性別（ジェンダー）を標的に、攻撃的または侮辱的なコメントやメッセージ、または他のコンテンツを投稿された（例、性差別的な冗談やレイブに関連する冗談など）】	2	0.5	406	99.5
27 【私のセクシュアリティ（性的指向）や性的アイデンティティを標的に、攻撃的または侮辱的なコメントやメッセージ、または他のコンテンツを投稿された（例：「ゲイ」、「レズビアン」、「バイセクシュアル」、または「トランスジェンダー」に関するジョークやコメントなど）】	2	0.5	406	99.5
28 【オンラインゲーム空間や仮想世界（バーチャルリアリティ、VR世界）で、私の自認する性別（ジェンダー）を標的に、攻撃的または侮辱的なコメントやメッセージを投稿された（例：性差別的なジョークやレイブに関するジョークなど）】	1	0.2	407	99.8
29 【「性的な暴行を加える」といった脅しのようなコメントやメール、テキストメッセージをオンラインで送られたり、投稿されたりした】	0	0.0	408	100.0
30 【オンラインサイトや仮想世界（バーチャルリアリティ、VR世界）、オンラインゲーム環境上で、私のアバターやゲームキャラクターに対して、セクシャルハラスメントや望まない性的な要求を、他の誰かがしてきた】	0	0.0	408	100.0
31 【オンラインサイトや仮想世界（バーチャルリアリティ、VR世界）、オンラインゲーム環境上で、私のアバターやゲームキャラクターに対して、望ましくない性的行為を表すような視覚的な動きや言語的な表現を、他の誰かがしてきた】	0	0.0	408	100.0
32 【他の誰かが、オンラインサイト、メール、またはテキストメッセージを使用して、私に対して、望ましくない性的行為を描写または視覚的に表現してきた】	7	1.7	401	98.3

IV 考 察

本研究では、オンライン上でのコミュニケーションツールの急速な発達に伴い、メタバースを始めとした様々なオンライン上での性暴力が発生している現状や、その対策および基礎的なデータを収集することが求められていることを踏まえて、インターネット利用者を対象に、Web式質問紙調査を実施し、対面で発生する性暴力被害の実態を確認するとともに、オンライン上で発生する性暴力被害の実態を明らかにすることを目的として実施した。その結果、オンライン上で何らかの性的被害体験を経験した者は一定の割合で存在することが示され、対面での性暴力被害だけでなく、オンライン上での性暴力被害の拡大防止に向けた取り組みの必要性が示唆された。

まず、本研究の対象者である18歳から49歳の408名を対象にしたWeb式質問紙調査の結果から、対象者の23%は、オンラインまたは対面のいずれかまたは、その両方で、何らかの性暴力の被害をこれまでに一度以上経験したことがあると回答していることが示された。さらに、オンライン上および対面上の両方のどちらにおいても経験したことがあると回答したものは、6.9%であった。特に、人口統計学的要因としては男性よりも女性においてその経験率が高く、支援ニーズが高いことが明らかにされた。また、本邦において、若年層の性暴力被害の実態、認識、課題の把握を目的に実施された16歳から24歳を対象にした近年のアンケート調査（男女共同参画局，2022）においては、26.4%が何らかの性暴力被害にあったことがあると報告されており、本研究で確認された23%という数値は、近年のアンケート調査結果と類似する値であった。なお、若年層を対象にした過去の調査は（男女共同参画局，2022）、情報ツールを用いた性暴力として単項目で回答を求めているに留まっており、その具体的な内容については明らかにできていなかった。一方で、本研究では、オンライン上で発生する性暴力を測定するために、諸外国で用いられている測定ツールを用いて（Powell & Henry, 2019）、その実態を包括的に測定して明らかにしている。この点において、今後の研究や臨床支援においては、単に情報ツールを用いた性暴力という一括りでまとめるのではなく、オンライン上で発生しデジタルテクノロジーによって促進される性暴力のサブタイプ（e.g., デジタルセクシャルハラスメント、画像ベースの性的ハラスメント、オンライン上の性的な攻撃や性的脅迫、オンライン上のジェンダーやセクシャリティに関するヘイト、仮想空間上で発生する性的いやがらせ、ディープフェイクなどの画像生成技術を用いたいやがらせ等）を踏まえた上で、その実態を示した点が、本研究の意義であると考えられる。

また、性暴力被害経験者を、体験なし群、オンラインのみ群、対面での性暴力被害経験群、オンラインと対面の両方で性暴力被害経験群の4群に分類した検討において、各群の特徴が明らかにされた。具体的には、何らかの性的被害体験を受けた者におけるPTSD症状の重症度に関して、オンラインのみでの性暴力被害経験群と、対面のみでの性暴力被害経験群、オンラインと対面の両方の経験群の間では統計的な有意差が示されなかった。これはオンラインよりも対面上での性暴力の影響度が強いと必ずしも解釈できない結果であるとともに、オンライン上で発生する性暴力被害の対策および支援の必要性は対面で発生する性暴力と同様に喫緊の課題である可能性を示唆する結果と解釈することもできる。また、オンライン上で発生する性暴力のみの被害経験者よりも、オンラインと対面の両方とも経験した者にお

ける精神健康が悪いことを踏まえると、累積的に繰り返し何らかの被害体験に遭遇する者において支援のニーズが高く、より密度の高い支援を提供する必要性を示唆する結果であった。なお、本研究では、PTSD症状の心理社会的保護要因として、感情を上手にコントロールする要因の役割を検討した。先行研究で示されるように (e.g., Ehring, & Quack, 2010), 性暴力被害経験者に対して、その症状を低減するためのアプローチの一つとして、感情を上手にコントロールする力を高める必要性が示唆された。また、客体化される感覚などはPTSD症状と関係していることが示されたが、今後は、リスク因子として考えられる客体化された感覚の役割についてもさらに検討する必要があるだろう。

本研究では上記で示したように、本邦の性暴力被害の実態を定量的に明らかにした研究であり、性暴力被害の支援研究を前進させるものである。一方で、本研究には限界点と今後の課題がある。まず、本研究では、性暴力の発生割合が若年層に多いことから、対象者を49歳以下とした。しかし、性暴力そのものは、小児から高齢者までどのような年代層であっても遭遇する可能性はある。このことから、今後の研究では、対象者の年代を拡大したうえで調査を行うことも必要である。なお、幼少期の性暴力被害の実態を検討するうえでの具体的な手続きや調査方法についてはさらなる検討が必要であるだろう。次に、本研究ではVR技術を用いた性暴力被害は定量的に確認することができなかった。この点については、本研究の対象者においてVRゴーグルや仮想空間を積極的に利用するユーザーではなかった可能性が挙げられる。実際に、三菱総合研究所 (2023) の報告によると、メタバースを過去に利用経験がある者は5.5%であり、このうち月に1回以上アクセスしている者は30%ほどであったと報告している。このことから、VRのアクティブユーザーそのものが本研究の対象者には少なかった可能性が考えられる。その一方で、Blackwell et al. (2019) が報告するように、ソーシャルVR上での性暴力は確認されていることを踏まえると、今後の研究においては、VRゴーグルのアクティブユーザーを対象者に含む必要があるだろう。

V 結 語

本研究の結果、オンライン型の性暴力被害を経験したことがある者の数は、オンラインではない対面型の性暴力被害を経験した者の数を上回っていた。このようなオフライン型の性被害の実態に関する学術研究が実施され、基礎データが得られたことは、申請者の知る限り国内初であり、意義深い。また、これらの結果から、オンライン上の性被害のみならず、オンライン上の性被害の予防や支援のあり方を積極的に検討する必要性が示唆されたと言える。今後もテクノロジーの発展とともに被害者は増えていくことが予想される。今後も、オンライン型の性暴力被害によるPTSD症状等の実態やメカニズムを実証的に明らかにして、適切な治療を提案していく必要があるだろう。

【参考文献】

- Araki, K., Kiuchi, K., & Kishi, K. (2021). Risk and Protective Factors for Poorer Overall Health, Increased Psychological Distress, and Suicidal Ideation Due to SARS-CoV-2 outbreak in the General Japanese Population. *OBM Integrative and Complementary Medicine*, 6(1), 1–30.
- Bastian, B., & Haslam, N. (2010). Excluded from humanity: The dehumanizing effects of social ostracism. *Journal of experimental social psychology*, 46(1), 107–113.
- Blackwell, L., Ellison, N., Elliott-Deflo, N., & Schwartz, R. (2019). Harassment in social virtual reality: Challenges for platform governance. *Proceedings of the ACM on Human-Computer Interaction*, 3(CSCW), 1–25.
- Bóthe, B., Koós, M., Nagy, L., Kraus, S. W., Demetrovics, Z., Potenza, M. N., Michaud, A., Ballester-Arnal, R., Batthyány, D., Bergeron, S., Billieux, J., Briken, P., Burkauskas, J., Cárdenas-López, G., Carvalho, J., Castro-Calvo, J., Chen, L., Ciocca, G., Corazza, O., Csako, R., ... Vaillancourt-Morel, M. P. (2023). Compulsive sexual behavior disorder in 42 countries: Insights from the International Sex Survey and introduction of standardized assessment tools. *Journal of behavioral addictions*, 12(2), 393–407.
- Chou, P. H., Wang, S. C., Wu, C. S., & Ito, M. (2023). Trauma-related guilt as a mediator between post-traumatic stress disorder and suicidal ideation. *Frontiers in psychiatry*, 14, 1131733.
- 男女共同参画局 (2022) 令和3年度若年層に対する性暴力の予防啓発相談事業 若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート及びヒアリング結果報告書 https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/r04_houkoku.html
- Ehring, T., & Quack, D. (2010). Emotion regulation difficulties in trauma survivors: The role of trauma type and PTSD symptom severity. *Behavior therapy*, 41(4), 587–598.
- Gratz, K. L., & Roemer, L. (2004). Multidimensional assessment of emotion regulation and dysregulation: Development, factor structure, and initial validation of the difficulties in emotion regulation scale. *Journal of psychopathology and behavioral assessment*, 26, 41–54.
- Ito, M., Takebayashi, Y., Suzuki, Y., & Horikoshi, M. (2019). Posttraumatic stress disorder checklist for DSM-5: Psychometric properties in a Japanese population. *Journal of affective disorders*, 247, 11–19.
- 金井嘉宏, 笹川智子, 陳峻雲, 鈴木伸一, 嶋田洋徳, & 坂野雄二. (2004). Social Phobia Scale と Social Interaction Anxiety Scale 日本語版の開発. *心身医学*, 44(11), 841–850.
- Koss, M. P., Abbey, A., Campbell, R., Cook, S., Norris, J., Testa, M., ... & White, J. (2007). Revising the SES: A collaborative process to improve assessment of sexual aggression and victimization. *Psychology of Women Quarterly*, 31(4), 357–370.
- Maniaci, M. R., & Rogge, R. D. (2014). Caring about carelessness: Participant inattention and its effects on research. *Journal of Research in Personality*, 48(1), 61–83. <https://doi.org/10.1016/J.JRP.2013.09.008>
- 三菱総合研究所 (2023) メタバースの認知・利用状況に関するアンケート結果, https://www.mri.co.jp/knowledge/column/dia6ou0000054w41-att/mtr_20230330.pdf
- Moor, A., Ben-Meir, E., Golan-Shapira, D., & Farchi, M. (2013). Rape: A trauma of paralyzing dehumanization. *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*, 22(10), 1051–1069.
- Muramatsu, K., Miyaoka, H., Kamijima, K., Muramatsu, Y., Tanaka, Y., Hosaka, M., ... & Shimizu, E. (2018). Performance of the Japanese version of the Patient Health Questionnaire-9 (J-PHQ-9) for depression in primary care. *General hospital psychiatry*, 52, 64–69.
- Powell, A., & Henry, N. (2019). Technology-facilitated sexual violence victimization: Results from an online survey of Australian adults. *Journal of interpersonal violence*, 34(17), 3637–3665.
- Talmon, A., & Ginzburg, K. (2016). The nullifying experience of self-objectification: The development and psychometric evaluation of the Self-Objectification Scale. *Child Abuse & Neglect*, 60, 46–57.
- Weathers, F.W., Blake, D.D., Schnurr, P.P., Kaloupek, D.G., Marx, B.P., & Keane, T.M. (2013). *The Life Events Checklist for DSM-5 (LEC-5)*. Instrument available from the National Center for PTSD at www.ptsd.va.gov